

わが心の遍歴 最終回

(9) 現代における宗教と哲学の問題

花岡 永子



花岡 永子 (別姓: 川村 永子) / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教哲学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老練家。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究所教授として哲学、宗教学を教える。

著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キェルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

現代は一般的には、宗教無き時代と言われ、また哲学無用論が説かれる時代と成り果ててしまっている。何故だろうか。それは、円とか球に譬えて言えば、世界の殆どの人々が自らのみが世界の中心、宇宙の中心であるということのみに生き抜こうとしていて、森羅万象の一切がすべて、絶対の中心であると同時に、世界あるいは宇宙が形成されて行く過程における一周辺でしかないということをおぼろげに忘れているからではないだろうか。

キリスト教においては、ルターが『キリスト者の自由』の冒頭の部分で、「キリスト者は、全てのものに仕える下僕であると同時に、神以外の全てのものに君臨する王者である」という意味のことを語っている。また、禅においては、「賓主互換」といって、仏をもキリスト教の神のように特別視せずに、賓と主が常に交換可能な変化自在の境涯に生きられる。大乘仏教を基礎とした西田哲学においては、一と多、自己と世界、事と理、時間と空間等々は、対象的には絶対に矛盾し、相対立して、二極的、二元的であっても、「絶対の無限の開け」である西田の所謂「絶対無の場所」においては、それらは同時に一として成り立つ。

諸科学は、ハイデッガーも述べているように、本来的にこの世の現象界に属するものを研究対象とする。ここでは、個々の人間のあり方は、万物のいわば絶対の中心であり、現象界の一切を対象化して、自らの前に立て、表象して、これを色々に観察する。ここでは、観察者の人間の自我は、観察されるものの渦中にはなく、その外部に、観察されるものとは別個のものとしての観察者に留まっている。

しかし、19世紀末のアインシュタインの相対性原理や20世紀初頭のN.ボーアの量子理論やハイゼンベルクの不確定性原理が妥当するようになってからは、物理学の領域からも、ミクロの世界では既に観察者が観察されるものから分離されて、前者が後者から無関係に観察することが不可能となり、時間と空間の絶対化が不可能であるのみならず、因果律すらも妥当しなくなってきた。哲学においても、主観と客観が対立して、前者が後者を観察し、記述することが、実存思想や実存哲学の勃興以来不可能となってきた。この傾向は、実存思想関係の哲学においてのみならず、本質(essentia)と実存(existentia)の根源としての「生」から哲学するニーチェの「生

の哲学」によって更に徹底化した。またその後、生をも遥かに超越した「有そのもの」(この世の現象的なものとしての「有」[beings]の根源と理解された「有そのもの」[being in itself])から新たに哲学しなおそうとする20世紀の偉大な哲学者の一人であるハイデッガーによって、先の傾向は、20世紀における逃れられない哲学の根本事実となった。自然科学からも精神科学からも、現象界のものに主客分離の立場から対象的にかかわる科学のみでは、もはや科学の探求は全体的に十分にはなされ得ないことが、既に20世紀に事実として露となった。同様のことが、哲学についてのみならず、宗教についても語られ得ると考えられるのである。

1. 哲学と宗教について

哲学とは、ギリシア語の語源から理解すると、「知恵への愛」を意味するが、知恵への愛が、約3千年の哲学の歩みの中で、「知識への愛」となってしまうてきている。哲学が知恵への愛である限りでは、哲学の役割は、一切の学問領域のみならず、一切の生活領域をも基礎づけ、連関づけ、説明できるのでなければならない筈である。しかし、知識への愛となってしまうてきた哲学は、他の諸科学と並ぶ一科学になり下がらざるを得ない。この場合には、哲学は「学としての哲学」以上のものではあり得ず、他の諸科学や生活世界とは内的関係のない一科学となり果ててしまい、現実から浮き上がった、現実の生活とは内的関係のないものとなり、諸科学間の連関性や、またそれらの生活の諸領域との連関性を説明することも、反省することもできなくなり、結局哲学は、何の役に立たないという理由で、現代におけるごとく、無用と見なされてしまうことになる。

しかしながら、哲学は、学としての哲学であるのみならず、諸科学をその根底から基礎づけ、連関づけ、更に諸生活領域をも基礎づけ連関づけ、且つ諸科学と諸生活領域との関係を根源から連



1976年暮の学会の懇親会にて。向かって左から故高田三郎京都大学名誉教授（私たちのお仲間）と亡き夫・川村栄助。

開づけ、基礎づけ、説明し、反省することができるのでなければならぬと考えられるのである。しかも、後者の哲学の核心には、宗教が生きているべきであると理解されるのである。というのも、ここで語られる宗教とは、既成の何らかの宗教教団に帰依することだけを意味するのではなく、森羅万象の根底に開けている心とか、宇宙全体に通底している開けを意味しているからである。筆者は、この開けを「絶対の無限の開け」と理解している。この場合の「絶対」とは対を絶しているだけではなく、絶対の「自我否定」を意味し、この否定によって真の自己が自覚め、思考や生きることに対しての何らの強制的な枠組みも無い、無限の開けに慈悲やアガペーとしての愛に自由自在に生きることの可能な開けが自覚されることを意味しているのである。

2. 現代における宗教と哲学の問題

哲学が生活から切り離され、宗教が哲学から切り落とされて、一方では現実から浮き上がってしまった「学としての哲学」のみが生き残り、他方では宗教無き時代へと世界は変わり果て、豊かな人間性と倫理性とか宗教性の無い世界に私たちは生きている。このなかで、森羅万象に通底し、宇宙全体に開けている「絶対の無限の開け」の自覚としての宗教が、そしてこの自覚から、諸科学や諸生活領域が基礎づけられ、連関づけられ、説明され、反省され、そこに生きる各々のものの霊性や人間性やその倫理性や宗教性が反省される哲学が、今この時代にどうしても、私たち一人ひとりによって見出されるようにと努められねばならないと考えられるのである。

ところで、今年の7月中旬には、イギリスのケンブリッジ大学で、イギリスの世界人名辞典協会の第28回国際会議が開催された。筆者も初めてそこの講演に招かれて約1週間、200名の世界各国の派遣者の方々と生活を共にしてきた。そこでは、それぞれ自らの歩む道を通して、しかも一切の権力欲や名誉欲や暴力から自由で、平等な友情と対話で世界を結びつつ、世界の平和を実現しようと命懸けで努力する人々の会議が既に30年以上も続けられてきている。これは、どんな営利事業からも、どんな党派心からも全く自由な会議である。こんな国際会議があることすら知らなかった筆者で



1994年9月京都の拙宅にて。向かって右からR.ヴィール教授、P.オバンク教授、筆者。

はあったが、このような志を同じくする方々の集まる会議に招かれ、この協会の永世維持賛助会員に指名されたことは、今後のこの世での筆者の多難な心の過歴にとって全く思いがけない大きな恵みであった。このような志を同じくする方々との出会いは、心の旅路に100倍もの勇気を与えてくれるからである。

思えば、20数年前に、40代半ばにして全身を癌に冒されてこの世を去るにあたり、「自分の分も学問に励んでくれ」という言葉を残していった今は亡き夫の思いは、この筆者にはなかなか果たせそうにもない。しかし、たとえ歩みは遅くとも、一步一步を誠そのものをもって歩みたいものと思っている。夫の重病によって間もなく一人残されるであろう筆者を思いやってくることと思われるが、重病人の夫から筆者は申し訳なくも色々生きる勇気を与えられた。例えば、筆者の母方の曾祖父である島田董村（本名：島田重礼）の東大での漢学の講義には、まだ学生であった西田幾多郎博士が聴講していたと、下村寅太郎著『若き西田幾多郎先生』のその事実を書いた文章を示しながら、西田哲学の難しさに嘆く筆者を「やれば出来る」と励ましてくれたのも亡き夫であった。また、世界哲学会でハンブルク時代に夫の指導教授であったP.オバンク教授やR.ヴィール教授にお会いし、筆者の哲学の歩みを力強くするようにと、哲学にたじろぐ筆者を諷めてくれたのも亡き夫であった。筆者が、早期の癌の開腹手術後で腹痛を抑えつつ死を覚悟で、夫の言葉を思い出しながら、1993年のモスクワでの世界哲学学会に研究発表に出かけたことがあった。モスクワ空港からバスでモスクワ郊外の高層の国際学会場に駆けつけて、入口のエレベーター前に大きなスーツケースをもって近寄ると、そこにはP.オバンク教授とR.ヴィール教授がお二人でエレベーターを待ちながらお話をしていた。そこで、約20年ぶりの積もりにも積もったお話をし、それから1週間程学会でしばしば一緒になり、筆者は両教授との学会での対話で、生死の間を彷徨う程の体調から、大きな生きる力をお与え頂いて帰国したのであった。しかも、その翌年には両教授は、京都での国際会議にご出席の序でに、その学会に筆者をご招待下さり、更に国際会議後、京都の拙宅での夕食にまでも来て下さった。これらの出来事について、両教授に、また今は亡き夫にも心から感謝している。